

池田小菊未発表原稿

朝顔

翻刻・解説 吉川仁子

弦巻克二

せたくないものだと、いかにもさし追つたことのやうに感じた。

「お前も一緒に出ればいいのに」

氣分を引立てる積りで、京子は言つても、敏子は何時でも白けた顔をしてゐた。京子でも仲にはいればだけれど、彼女達きりではしやぐ様なことは、その頃滅多となくなつた。性格の異ひはある。が、京子はそれを、年齢から来る憂鬱とより思へなかつた。

敏子が仕事してゐる傍へ、京子はよく坐つた。放つて二階へ上るのが、何となく氣がかりになつて、

「この頃秦さんと出逢はないかい？」

そんな風に話しかける時があつた。

「ええ、あの町はなるべく通らないことにしてるから」

獨身といつても、安子の方だと、不思議に切迫した感が起らない。小柄ではあり、彼女は見掛けの若い女である。時々甚いヒステリーを起して、京子をびつくりさせることがあり、争はれない中年が、彼女にも来かかつてゐるのだが、それも発作的で、あとはケロリと快活な顔をした。

「安ちゃんまた出かけたの？」

二階から降りて来て、京子が敏子に聞くのが普通だつた。大抵の場合、敏子は一人で机にすがつてゐるか、縫ひ物をしてゐた。森閑とした淋しさが、京子の胸に応へる。年頃の敏子が、さうして燻つてゐるのを見ると、たまらなかつた。せめて敏子だけは、変な型の女になる迄、持越さ

朝顔

池田小菊

獨身といつて、^安京子の方へと、不思議に
 切迫した感も起さずい。小坂にはあり、彼女
 は見探しの若い女である。時々甚いヒステリ
 ーを起して、京子を^{ハブ}驚かす。その^{ヒステリ}性^のあり
 争はれらるゝ中年か、彼女にも未かか。つてある
 のが、それも発作的で、あとはケロリと快
 活な顔をしてた。
 一、^{ハブ}安子^のやんまを^{ハブ}出かけたのさ。
 二、^{ハブ}管^のおろ降りに来て、京子^の教子に南くの
 如普通だった。大抵の場合、教子は一丈を
 にす加つてゐるか、儘が物まじりの森田
 と一に湯し、^{ハブ}京子^の胸に抱へる。年頃の
 教子か、さうして、^{ハブ}燒^つてゐるのを見と、た

「そりやまた窮屈な考を出したもののね」

「だつて誘惑的だなど思はれちや厭ですもの」

「といふよりは、逢ひたいつて氣がないの？」

「別に」

餘りに白を切つて見せると、ある場合京子を不機嫌にした。機嫌のいい時だと、

「何だつて 隅へは置けないくせに」

と、からかひ半分に言ふのだが、氣持の穏かでない時には、

「あれも、これも、まるで尼寺みたいだ」

と、刺のある言葉が飛出した。それ程京子は女の獨身者を、神経質に考へた。自分の経験から、それ程白つぱくれて居られようとも思はれなかつた。と言つて、京子も独身であるが、桃色の情熱に燃えた時代は、とうに過ぎてゐる。持越してゐるだけ、いい風向に逢ふと、恐ろしい焔を立てるものかも知れない。が、京子の中では、最早や氣味悪い程、穏かなものになつてゐる。自分も年をとつたと、しみじみ思ふ程。しかし、達観したらしいその自分を見ると、京子は腹が立つた。嘘！ 恐ろしく澄み淀んで見えるのは、只ほんの上皮だけのことである。靜かに自分の胸に

耳を當てて見ると、鳴動が聞える。底の底の方で、渦巻きかへつてゐる。若い者の味方になりたい氣が、無茶に強く動いたり、自分の家から嫁入りといふものを出して見たかつたり、自分の手から嫁入り装束をつけた小鳥を飛ばして見たかつたり………一人旅は淋しい。しかし、斯う持越して終ふと、それ程センチメンタルでは生きて行かなかつた。淋しいことの淋しさを知り、その淋しさを信じて、京子はまづ喰べて行かなければならなかつた。鳴動を包んだ沈黙よ。何と穩かに装うてゐることか。

京子の周囲には、多くの女性がある。或日、南窓のそばへ椅子を持寄つて、四五人話してゐるところへ、京子が這入つていつた。外の泰山木から、白い香がすかすかに流れてゐた。冬中暖爐の周囲へ持寄つた話が、その頃になると、そろ／＼そこへ移轉し始める。彼女達は銘々の仕事を持つてゐるから、そんなに集めるのは、大抵晝飯時に決つてゐた。日當りのよい窓内では、ぽか／＼と筋肉がふくれる。大抵の場合、彼女達はそこで仕事の話をする。たまには芝居や音楽の話もする。しかし彼女達は、所謂世間話といふものは、見くびつたやうに口にしない。殆ど交渉がないか

らでもあるが、それだけ自重した女性が多いといふこともなる。彼女達だけではない。その周囲に住む人々は誰もさうなので、さながら一小王國の感がある。

京子は手近な椅子を引出して、仲間にはいつた。

「本當に若くなりなすつたわね」

中の一人は、何かの話を續けてゐた。

「もう少し早くいらつしやればいいのに」

一人は、京子を話の中へ引入れるやうに、話しかけた。

「何か珍しいことでもあつて？」

「今ね、長田さんが通りなすつたのよ」

何か事新しい出来ごとが、みんなを興味づけてゐるやうだつた。長田といふのは洋裁部の主任だつた。彼女に事件が起つたとしたら、亦、結婚か洋行かだらうと京子は思つた。さういふ場合、さう想像して、大抵は間違はなかつた。

独身女の三十といふ歳は、いかにもあぶなかしい人生の危期である。阪を越して二三年経つと、水に押流される船のやう、纜を引ききり、それ／＼に墓穴を求めて王國から姿を消して行つた。已に老境にはいつた地方長官の後添ひになつて行くのもあつた。子沢山な金満家の後入りにはい

つて行くのもあつた。歳下な會社員の細君となり、殖民地へと渡るのもあつた。結婚でなければ洋行。京子はさういふ類の話を、何時も誰よりも遅く知つた。殆ど行渡らなければ、さういふ席では話に出ないのだが、京子は大抵の場合さういふ席で、初めて知つた。京子の友人も京子に似てゐるところから、尚更さうなるのかも知れない。

「あんなに立派に出来上ると、どこへ押出しても、ひげ目はとらないわね」

「堂々としたもんだわ」

洋行だなと、京子は思つた。

「どこへいらつしやるの?」

京子は聞いた。

「初めはアメリカでせう」

長田を中心にした噂が、暫く續いた。

「でも、四十近くなつてから、文部省留學生もねえ」

皮肉好きの若いS子は、一かど達觀した顔附で、話の括りをつけるやうに言つた。S子はふだん師範教育を受けたことの失策を、口癖に悔んでゐた。

「い、え、どんなにか氣が利いてるよ。一人でさへ帰つて来なけりや」

と、京子はつけ添へた。

ひからびた曲解を含めた笑声が、ばらばらに上つた。京子は自分の言葉の迂濶を咎められた氣がして、一寸極りが悪るか^ツつた。

そんな話をして別れた後は、京子は何時も氣分が塞いだ。

せめて自分の家の者だけなりと、生きるべき道へ、眞直ぐ送届けてやりたい。京子はさう思つた。

敏子を對手に、二言三言別な話をしてから、京子は二階へ上つた。

二

初め京子は或家の二階を借りてゐた。神經質なその細君は、京子の身の廻りのことまで、行届いて世話してくれた。初めの内は京子もいい氣になつて世話をかけてゐた。その主人は、細君に輪をかけた陰鬱性で、時によると十日も黙りこくつてゐたりした。子供が四人もゐて、騒ぎ立てるし、事情が解ると、知らぬ顔をしてゐられなくなつて来た。京子は子供上りの女中を雇つた。自分の世話をと言

ふよりは、子供達の守を兼ねられるやうなのをと思つて。

「一寸階下へ」

細君は、階段から頭をつき出して、京子を呼ぶことが時々あつた。女中の留守の間に限つて。さういふ時には、大抵勝手まで引張られていつた。

「ほらこの通りですよ」

細君は、女中がはしりへ持出してゐる京子の方の櫃の蓋を、世帯なれた手つきで、大層らしく取つて京子に見せた。

「昨日のはこれですよ」

列べて置いてある、鍋の蓋をとつた。どちらにも残飯がはいつてゐる。

「勿体ないでせう。みんな鶏の餌になるのですから、私の方では大変結構なんですけど、これではあなたの懐がたまりませんよ」

京子は笑つてゐた。

「あんまりお坊ちやんでもいけません。時々は見廻つておやりにならなきや。細かいことまでお知らせするやうだけど、炭だつて私の方で二俵焚く間に、あなたの方は三俵なんですからね」

「ありがたう。でもね、一人で冷御飯をたべてゐると、変に淋しくなつたりするもので」

「そのお氣持は解りますけど、それならそれで蒸釜をお買ひになるとか、温いのが出来る時分に、上に乗せて温めさせるとか、方法はいくらかもあるんですからね」

細君は、いかにも母親氣どりで言つた。二つ歳下ではあり、平生は京子を随分尊敬してゐるのだが。京子はそれを知つたからと言つて、それ程女中を責める氣はなかつた。それよりは、言ひなみに手敷をかけてゐる女中の正直を、受けてやりたい氣がした。ちやんとしてくれるに越した事はないが、それがために、一々自分が指図するのでは、やり切れない氣もした。

「ええ、ありがたう」

京子は笑ひながら、いい加減な返事をして、戻らうとすると、

「この方つて」

細君は、京子の肩をぼんとたたいて、

「まるで内の主人みたいですよ」

と、張合ぬけのした笑ひ声を出した。

京子が勤めに出た間に、女中のとつた菓子代が、月末に

七円も書きつけが来たといつて、叱られたこともある。それも淋しい時には、菓子をとつてもいい、子供の愛相にもなるのだからと言つたことを、女中は正直に受取つたのだつた。

友達が遊びに来て、借ぶとんをした。二三日で帰る積りが四十日近くもゐて、二十円いくらの借賃をとられた。

「今度のは、私が悪いんじゃないやありませんよ。」

懸取が外へ出ると、京子はすぐ細君に言つた。

「借りるやうにとおつしやつたのは、あなたですから」

「だつて、あんなにいいのを借らなくもいんだし、それに借りる時だつて、ちゃんとお値段を聞いておくもんですよ」

「ずっと安く借りられるもんだと思込んでましたから」

「いいことよ。今に似合ひのお嫁をお世話して上げますからね」

そんな生活を一年餘り続けた時、姪の安子が、京子を頼つて、郷里から出て来た。丁度近くの女学校に欠員があつて、安子は間もなく職についた。其年の春、その主人が轉勤になり、京子達は獨立の住ひを始めた。家事裁縫が、安子の専攻学科だつた。誠に恰好の生活が、形の上に成立

つたわけである。しかし京子には、女中と二人住居の方が氣楽だつた。對手が獨立の生活者だと、煩雜な氣配りがいる。家の中の仕事に分業の始つたのも、そのためだつた。そこへ東京に出てゐた従妹の敏子が卒業して来た。そして彼女もある事情から、京子のところへ落着くことに話がついた。安子も好意を持つて迎へたやうだつたが、京子はそれですつかり救はれた氣がした。今の家に移つたのは、それからである。二階の三疊と六疊を、京子がとり、彼女達は、階下を分けて持つた。京子が女の仕事を何一つしなくて済むやうになつたのも、それからである。京子は、家賃電燈瓦斯新聞代といつた、家にかゝる費用の全部を、一人で出すことにしたのは、労力の代償を意味した積りだつた。が、何時の間にか、そのことが、京子を家長の格に祭込めた、家庭的な感のするものに、造上げてしまつた。

さういふ生活が、四年目へと足をかけたのだ。

「秦さんから、今日敏さんに手紙が来てゐたでせう。御覽になつて？」

安子は思出したやうに言つた。その日敏子は留守で、二人の前の食卓に、夕飯の後の瀬戸物類が列んでゐた。

「矢張り何時ものやうな調子のもの？」

安子は、好奇的な表情で、引つけて聞いた。

「ずゐぶん信じ切つてるからね」

「敏さんにも可能性は十分あるわね」

「十分はどうか解らないけど、破談になれば悲観するかも知れないね」

「それでゐて、随分可笑しいわねえ」

「なにが？」

「だつて頭が高いにも程があるじゃありませんか。この話
ももう三年越しよ」

「――」

「敏さんは、自分を美しいといふことには、随分強い自尊心
を持つてゐてよ」

京子は顔付だけで軽い返事をして、わざと素氣なくした。本當はどんな氣持で見ゐるのか、安子の心持を知りたくて。安子は妹を嫁づけた時には、最後まで明るい氣持でゐたやうだけれど、それは別居してゐた関係とも思へる。若しこのことが、厭にもつれ込む様だつたら、京子は、一人最後まで好意を持つて支へ切れなくなりさうに思つて恐ろしかつた。

安子は、晴々した表情はしなかつた。しかし、嫉妬に見

える程のものでもなかつた。

三

安子は、仕事最中であつても、十時になると毎夜慌て、
寢床をのべた。安子はふだん睡眠不足を何よりも苦し
た。

遅く迄仕事をした夜、京子は小用に行かうとして階下に
降りた。降りたての四疊半は敏子ので、隣の六疊は安子の
である。どちらの電燈にも、縁の覆ひがかかつてゐる。ば
ら模様のとおりぼとりおいてある緋裏の掛蒲團から、安子
は胸から上をおつ放出して熟睡してゐた。いくらか反齒な
ので、半開の椿のやうな口許をして。夢なかば、底のない
からから笑ひが飛出しさう。同じ模様の蒲團にくるまつ
て、同じ方向に枕をしながら、襖一重、斯うもよく思ひに
明暗があるものだと京子は思つた。毎夜形の如く寢床へ持
込む安子の雑誌は、開いたまゝ、に伏せてあり、敏子のは總
のついたりボンを挟めて、ちゃんと閉じてある。口を締め
た糞虫。敏子は覗き込むやうに、顔すつかりを蒲團の中
につつ込んで、横向いてゐた。寝ながら書きつけたらしい日
記帳が、彼女の夢の浅いことを語るやうに。

「自分が男だつたら、どつちへ言寄るだらう」

京子はふつとそんな事を思つた。京子は間の敷居の上立ち、襖の横木へ背をもたせかけて、二人の寝姿を見てゐた。

寢床に這入つてから、不意にヒステリックな啜り泣をはじめ、傍の者を吃驚させることがあつても、暫くで眠り込み、晝はケロリと快活な顔をする安子は、肩が凝らなくていいだらう。理智にめざめてゐるだけ、敏子は解りがよくていいだらう。だが、強い征服慾で、口のあたりの筋肉をびくびくさせながら、掴みかゝつて来られたら、安子には參るだらう。天井の火事に脅え通してゐるやうな敏子の機嫌をとるのでは、うんざりするだらう。二人とも何れはどこかの男と結びつくのだが、これからの男に世迷言が多くなりさうな氣がした。

しかし、二人とも若い。ふさ／＼とした漆黒の髪を持つてゐる。自分のと比べて。こんなところで斯んな事を考へて見るだけ、自分の上には、立派な齡が来てしまつてゐる。二人の寝姿を見てゐると、京子は甚くなつかしい氣がして来た。

京子は、遅れて床につく時は、決して階下の戸締りを見

廻つた。或夜、はぐれ鹿の悪戯を泥棒と間違へてから、階下の戸は一枚一枚釘づけになる様にさせた。が、安子は勿論、敏子もそれをよく忘れた。強盗など噂にも聞かない平穩な市である。火事なんかも殆どない。靜寂な市の、而も露路内に住んでゐて、何の戸締りであらう。京子は、二階の戸だと閉めずに寝ることがよくある。夏だと障子も明けつ放したまゝ、寝ることがある。それなのに、階下の戸だけは、完全に鍵がかゝつてゐないと安心できなかつた。外敵を恐れてではない。といつて、彼女達の行為を監視したい氣持からでもない。今に落ちるであらう熟柿の上を、夜露を知りながらも、そつと延紙で包んでゐたい氣持が、本能的に強く動くのだ。全く徒勞に過ぎないことを、毎夜繰返して、それで京子は安心する。

小用を済ませてから、京子は表裏の兩戸、玄関、裏口の順に、一つ一つ手探りに調べた。見廻つてから二階へ上らうとした時、安子は凄い齒ぎしりの音を立て、敏子はぬうつと頭を上げて、京子を見た。

京子は、勤め先から帰る時、露路をはいると、身体を横に曲げ、自分の家の様子をのぞくのが、癖になつてゐた。

京子の帰る前に、彼女達が帰つて、ちゃんと戸を明けてゐるのが普通だった。京子は何時も三時過ぎにかへるのが、何かの都合でそれより早く帰るか、彼女達の帰りが遅くなる場合には、時間を見計つてからでなければ帰らなかつた。露路先から覗いて、戸の閉つてゐる時には、京子のがつかりした。さういふ場合、京子は何時も前庭のくぐり戸を開け、植込みの中の切石に腰かけて、彼女達の帰りを待つた。勤め先が一緒なので、彼女達は何時も連れて帰つた。京子は、別な鍵を持つてゐるのだが、戸を開け、一人で暗闇の家へはいるのは厭でならなかつた。蒸暑い空気がぼうつと顔にかぶさつて来、床下の土の臭ひのやうなのがこもつてゐて、いかにも空家らしいじめじめした感のする夏は厭だった。根太の根太まで冷切つた冬は、尚更骨身に応へた。何時も彼女達に揉消されることだが、京子は、氣轉の利いた書生をほしいと、始終思つた。石に腰をかけ、何かを讀みながら待つてゐる時、彼女達の下駄の音が聞え出すと、京子はほつとした。待つ間の辛抱の方が苦しい時があつても、京子は一人で家に這入る氣にはなれなかつた。

大抵の場合、安子が戸を開けた。安子はわけなく戸を明

け、忙はしきうに中にはいつた。そして上り口へ包みをつきつけておいて眞直ぐ裏口へ。其間に敏子は上に上つて雨戸をあけた。

彼女達は、家の中にこもつてゐる頹廢的な空氣を迫出したり、隅の隅へまで晴々した明りを届けたりする仕事を、羨ましい程造作なくやつてのける。彼女達は、帰つてからの仕事に苦しいなどは、決して言はなかつた。彼女達は、飽かず倦まず、八百屋を呼び肴屋を呼んで料理を塩梅した。若し彼女達が一人で自炊しても、それ程の間をかけるかどうか。彼女達の仕事は、京子とは比較にならない程楽なので、自然それだけの餘力を残して帰るのもあらう。女の仕事と決つた家政学を、職業にしてゐる故でもあらう。しかし京子は、家といふ意識が、彼女達の氣持をそれ程までに純真にさせるのだと思つた。さう思ふと、矢張り一日も早くその家を解散して、彼女達に永久の家庭を持たせたい氣がした。

彼女達が炊事をしてゐる間、氣分のいい時には、夏だと京子は表裏に水を撒き、植込みのあたりを奇麗にした。冬だと裏の長屋に這入つて、石炭の用意をし、暖爐を焚きつけた。しかし、それだけでは食事までに、尚二三分待た

なければならなかつた。それがまた、京子に待ちきれないじれつたい時間だつた。

京子は台所に行き、食卓の前に坐つて、子供のやうに物欲しさうな顔付をした。その恰好を見ると、敏子はくすくすと笑出し、安子は瓦斯の火を太くしながら、からかひ半分に、

「京さん位、まあよく喰奇ちをしたものね」と言つた。

「だつてお腹がすいてへとく〜だもの」

「だから少しでも朝飯をとるか、十時頃お乳でも召上るといいんだけど」

「出来ない相談よりは、とにかく早く欲しいナ」

京子は箸を両手で持ち、いかにもじれつたさうに、食卓の角をがちやく〜とたたいた。子供の頃、京子はよくさうして母にねだつたものだ。初めのうち、彼女達は其音を随分真剣にとり、苛々したやうだつたが、この頃ではすつかり呑込んでゐて、音が仕出して大抵の場合くすく〜笑つてゐた。その位なところが、京子にも氣持がよかつた。餘り本氣にとられ過ぎると氣の毒だつた。といつて知らぬ顔をされると張合がない。いい加減にあやされて、二十分三

十分待たされる間が快い。勝手もとの仕事を、満足して出来る人々へは、誰にでもそんな風に甘へることが出来るのか、それともさう言ふ類の人にも、つきつめた一人を求めめるのか、とにかく京子はエプロンをかけて、働いてゐる彼女達を見ると、昔母に感じたと同じなつかしさを感じるのだつた。外で精一杯働かなければならない生活が、男、女といふ分類を飛越して、自然にこんな風にさせるのだと、京子は勝手な意味をつけてゐた。

一日も早く解散しなければならぬと思ひながら、京子の中で、懐しさが少し根を組み過ぎてゐた。自分だけは時代的に恵まれないのだと思ひながら、疲れを持たむ、温い懐をほしかつた。それ程でもない事を、いかにも大層らしく言立て、それを加減にあしらつて貰へる、しとやかに靡くものをほしかつた。

「私は結婚したら、それこそ小言一つ言はせない、実に立派な奥様になつて見せるぜ」

と、京子は言つた。安子は吹出し、

「あなたが結婚して、妊娠でもなすつたら、それこそどこ迄でも追つかけて見に行くわよ」
といつて、彼女達は顔を見合せて、笑ひこけた。

四

七月頃であつたと、はつきり覚えてゐる。京子は朝顔の
手入を、一つの仕事にしてゐた頃だつた。晝は時間で仕事
をしなければならぬ関係から、少し込入つたことだと、
京子は、休日の前夜をよく夜明して仕事した。

「朝顔は、元來熱帯植物ですからね」

植物を研究してゐる知人が、時々来て京子に教へた。好
事家の新案だといふ、金属製の植木鉢を持つて来て、さう
いふ類の植物を栽培するのに適當なといふ理由を、説明し
てくれたりもした。京子は二階の東窓へ、粗末なかけ出し
を造つたのもその爲だつた。

疲れて朝になる頃。いくらか上氣した頬を黒塗りの机に
すりつけて、外を眺めてゐると、ひいやりとした明方の空
氣が、蚊やり香の煙にまぶされた室内の空氣を、過去の世
界へ押流して行くのが、はつきりとわかる。遠くに囁く初
秋の波動も聞える氣持がする。働く者には、その幾分間か
の大氣の動きが、芯の底までも応へて快い。丁度その頃、
朝顔の大輪が開く。

火の様に強烈なのから、水の様に淡冷なまで、十数種

の花に、京子は過去のまた現代の、女性の名を移して名づ
けてゐる。咲き出る時の辨の動きから、やがて胸の底まで
開いて見せるころまで、じつと見つめてゐて、一朝、一
朝、つけた名前である。その名で花を呼び、その名で色形
に親しんでゐると、氣持が静かに澄んでいく。

かけ出しの出来ない前には、狭い裏庭の、縁から降り
て、すぐ世話の出来る所へ、自分で柵を造つて列べてゐ
た。その頃、毎夕方、水をやり蔓先の手入をすますと、い
つかど年寄り氣どつた恰好で、縁に腰をかけることがあつ
た。そのの後戸袋のところ、彼女達の足踏ミシンがおい
てある。腰をかけ、両手をうしろへ突張つて、ぼんやりし
てゐた時だつた。京子は指先でハイカラな紙切を押へてゐ
た。奇麗にたたんであつたので、さり氣なく開いて見る
と、敏子の筆蹟で、京子を対象にした、情熱のささやきを
書きつけてゐた。

読んでいくうちに、京子の顔は、ぼうつと熱くなつた。
さういふ形のを、殊更に否定する氣はない。しかし、
斯ういふ境遇の中で、敏子の中から芽生へた形としては、
皮肉が露骨過ぎて、恥しかつた。いかにも恋愛の対象にな
りさうな、自分の姿が思出されて、今更、極りが悪るかマ

た。敏子が来て、一年ばかり過ぎた時で、秦からの求婚が始つて間のない時だつた。

その頃敏子は、秦が来ても滅多と逢はなかつた。逢ふことがあつても、ほんの暫くで、自分の部屋に引込んで終ふか、外へ出るかした。贈物があつても、それ程喜ばなかつた。しかし、彼が来ると、敏子は、若い女が愛人にだけじゃない様な素振りをしてはにかんだ。京子は見てゐて、好いてゐながら崩れて行く程、まだ氣持がたけ切らないのだと思つた。素直に出る程、熟してゐないのだらうとも思つてゐた。ある時には、職業の性質上、そんな風に率直なものゝを失つていくのではあるまいかと、考へて見たこともあつた。

「わざとらしく見えることも、時々ある様だけ」と、安子も言つてゐた。

「私達への遠慮からかも知れないわね」とも言つた。

安子への遠慮は、幾分あつたらう。しかし、京子は、その紙切を見るまで、そんな風に可なり楽な氣持で考へてゐたのだつた。

「さうではなかつたのだ。ある形をとつて若々しく成長し

始めてゐたのだ」

敏子のことだが、どつしりと京子の肩にかゝり出したのは、その時からである。

五

話の切目に、掌で顎を支へる癖を秦は持つてゐた。それがいかにも恥しさに品をつくる女の仕草に似てゐて、目障りだと敏子は言つた。近代的な彼の体格にも、腺病質な感のするところがあつて、頼りないとも言つた。最初のうちは、家族の多いことをも條件に入れてゐたが、彼の家庭を知つてからは、それは言はなかつた。

秦はいい繪をかけた。写真も非常に變つたものを撮つて来て見せた。詩もつくつた。秦から詩を見せられる度、京子は何時でも感心して、好意を持つた。それでゐて、彼は商人であるところにも、京子は興味を持つてゐた。普通の敏子が、普通に信頼して行けさうな普通の秦であると同時に、めざめようとする敏子の若い衝動と、びつたり道連れになれさうな、特種な秦でもある。配偶者といふ座蒲團の上に、列べて坐らせてみると、どちらを失つても淋しい氣がした。

「まあよく見てゐてごらん。私と話す時には、あゝいふ品はつくらないぜ」

と、京子は敏子に注意したことがある。

「純情的で金離れのいいところも、私は好きだよ」と、言つたこともある。

とにかくにも、上皮の方で苛々ばかりしてゐる敏子を、京子ははがゆく思つた。

裕からセルに移る頃の或日であつた。秦の方から、敏子と叡山に遊びたいと申込んで来た。京子は、それには不同意はなかつたが、浪漫的な背影アヤシでは、間違ひが出易さうに思つて不安だつた。

「もちつと地味な場所で、地味に遊んでごらんよ」といふと、秦は笑つてゐた。

生駒へ出かけることに話がきまつた前夜だつた。敏子は二階へ上つて来て、珍らしくしつかりした態度で、京子に話しかけて来た。自分の考を一通り話すにも、いい機会だと思つて、京子は機嫌よく仕事をやめ、敏子の方へ向直つた。

「私の氣持なんて、ちつとも解つて下さらないんだわね」

敏子は、そんな風に話込んで来た。さういふ話をする時

には、敏子は、身体を硬張らせて、ぼつりぼつりと物言つた。

「解つてはゐるけど」

「でも一日も早く私を追出して終ひたいんでせう」

「さういふわけじゃないけど」

「だつて」

「とにかく一旦は正しい恋をして見たがいいぜ」

「でも私、夫婦生活といふものを、良いとも美しいとも思へないんですもの」

「——」

「さういふことよりは、しつかりした方を頼つて、自分持前のものをもつとく／＼伸ばした方が、本當の幸福のやうに思へるんですもの」

「しつかりした方つて私のこと？」

「ええ」

「いやだよ。私の今の存在をそんなに決定的に考へて貰つては困るよ。私だつて風の吹廻しで、何時どんなことになるかも知れないんだから」

「そりやさうですけど、でも」

「それにお前だつて、その健康な身体で、今頃からそんな

了見を出すのは勿体ないぜ」

「じやあなたは、私にどうでも秦さんのところへ嫁けとおつしやいますの？」

「秦さんでなくてもいいけど」

「でも私この頃、男つて頼りなく思へてならないんですもの」

「一生不安な男とは、一生熱烈な恋が出来るんだと思ふけど」

「結婚して終つたら、何もかもそれでお終ひですわね」

「私とお前の間にかりに約束がなり立つとしても、私は矢張り今のやうな生活では厭だよ」

「え、そりや覚悟してゐるわ」

「時によると、今させてゐることより、もつともつと独専的な要求を仕出すかも知れないんだからね。斯うやつて仕事をしなければならぬ間は」

「ええ、それでいいわ。私今こそこんな風にしてるけど、そんな生活にはいると、今考へてどんなに世間並な通俗的なことだと思つてゐることも、喜んで出来ると思ふわ」

「それだと、對手が私でない方が、もつと眞剣な愛着を感じられるんじゃないか知ら？」

「だつて、それは何だか厭なんですよ」

「だからね、私は早くお前に職を止めてもらひたいんだよ。殊に斯ういふ職をとつてゐることをね」

「——」

「斯ういふ職を長くとつてゐると、そんな風にかたくな、考が出てくるからね」

「だつて今私はさうより仕方がないんですもの。却つてあなたの方が、私のことを神経質に考へてゐて下さるんじゃないでせうか」

「離婚にでもなつてからのことなら、それでもいいか知れないけど」

そんな話をしてゐる間に、京子は涙ぐましくなつて来た。

それ程つきつめたものを、敏子に感じてゐたのではない。自分の言葉に自分が感激して泣いたのだ。ひとりで泣けたのだ。敏子は京子のその目を、じつと見守つてゐてから、

「どうしてそんな淋しいことをおつしやいます？」
と、おろおろ声を出した。

京子は——單純であるべきこの愛の、この焦燥の恐しさよ——と言つて泣いたことのある或頃のことを思出しなが

ら、その感激に堪えてゐた。

「ねえ？」

「とにかく素直な氣持で行つてお出でよ」

「だつて私も嫁ぎ、安ちゃんも嫁つて終つたら、あなた一人になるでせう」

「そんなことは安心してゐていいの。それにお前が結婚すれば、私に力強い味方が殖えるわけでもあるし」

敏子は、坐り込んで終つて急に階下へ行かうとはしなかつた。

「今夜は、私の方で少し感傷的になり過ぎたからいいかなかつたね。とにかく先の先まで用心深く考へないがいいぜ」

京子は、機嫌を取繕ひ、慰めるやうに言つた。敏子は、それからも暫く沈込んでゐたが、しぶしぶ階下へ降りていつた。

その夜は、京子もそれきりで仕事をやめて寝てしまつた。

翌日晝前に、秦が出かけて来た。彼は灰色の新調の背広を着、古代更紗のネクタイをかけてゐた。敏子は、停留場まで別々に行きたいと言出し、一足先に出ることになつた。秦は上りもせず、玄関の土間でもじ／＼してゐるの

で、京子は二階へ呼んだ。暫く話して降りていくと、敏子はちゃんと出来てゐた。京子は、押入の口に立つて、持つて行く手提を出してゐる敏子の側に行つて、

「夕方早く帰つてお出でよ」

と小声でいふと、敏子はうつむいた儘ままうなづいた。

「あんまり変なところを歩いたりしないでね」

敏子は、上目づかひにちらつと京子の顔を見て、すねた笑ひ顔をした。

敏子は出かける時、玄関の格子を開けかけて、上り框に立つてゐた京子に、もう一度それと同じ目配せをし、格子にもたれてにやにやした。だが、敏子の表情には、前夜のやうな暗い影は消えてゐた。家を出て五六歩行つた時、京子と列んで立つてゐた安子が、敏子を呼戻した。念入りに結んでやつた帯のどこかに、氣に入らないところがあると、言つて。安子は敏子を前庭の巴旦桃ばだんとうの樹の下に連込んで、直してゐた。出来上つて出て来た時、敏子はちらつと京子の方を見、あはて込んで洋傘を開いた。そして其の洋傘で上体を隠すやう包んで、小走りに露地を出て行つた。

秦が出て行かうとするのを見て、京子は急に重荷のかぶさつた力応へを感じた。こちらで予期してゐる時間に、予

期してゐる場所で、予期通りの行動を、恰も望遠鏡で見えてゐると寸分違はないやうに、遊んで貰ひたい氣がして来た。軽い嫉妬がさうした拘束を欲したのか、それとも人生を一足飛びにした母性愛が、純真に動いたのか、荷の重い感だけは事実に残つた。

「中飯はV館がよからうね」

京子は、そんな事まで干渉した。

「やうします」

秦はこともなげに、明瞭に答へた。

秦は、勝誇つた悦ばしい表情をして、悠々と出ていった。彼と彼女。何といふ心忙はしさだつたんだらう。京子は、出て終つた後、暫くはそはそはとして、落ちつかれなかつた。

其日敏子の帰りは可なり遅かつた。しかし安子が案じる程、京子の氣にはかゝらなかつた。つき放して終ふと、却つて心丈夫な氣持がして、安心して居られた。秦の父母からも何の沙汰はなかつた。

宵が過ぎてからだつた。

格子を閉めるはしやいだ音がして、間もなくさばさばとした話声が、京子のところへ聞えて来た。敏子が帰つたの

だ。階下一杯にはでな喜びが満ちた様である。京子は急にそはそはして来た。降りて行かうと思つてゐる間に、敏子が上つて来、安子もついて上つて来た。

「只今、大変遅くなりました」

瞬間、敏子の様子が、変に作法的なものに見えた。が、敏子の顔中に、久し振りに、晴々した悦びが溢れてゐた。釣込まれて、京子も家の中に張つてゐた厚い氷が、きれいに溶けたやうな浮々した明るさを感じた。

「秦さんと停留場で別れたの？」

「い、え、私驛前で降りて一人で歩いて来たのよ。終末まで一緒に来るのが、何だか晴がましくて極りが悪いんですもの。池の傍が怖くて、すたこらさで走つたわ」

敏子のその流辨は、実に久し振りだつた。

「ね、それからどうだつたの？」

安子ははしやいで話しかけた。敏子にはそれには答へず、充奮した瞳で、京子の目を見つめてゐて、

「男つて本當に強い力を持つてゐるのねえ」

と、其日の感激を一丸めにしたやうなことを言ひ、言ひながら氣づいたのか、いかにも極り悪るさうに、いきなり京子の膝へすがりついて、顔を伏せてしまつた。

「ハ、ハ、ハ、」

京子と安子は声を揃へて笑つた。

しかし、その劇的な感動が、何故か京子の芯まで応へなかつた。膝の敏子に、一時に重味の出たやうな感は起らなかつた。疵一つつけてならない毀れ易いしろ物を、今、膝の上へつきつけられたやうな氣も起らなかつた。それでゐて京子は、

「よかつた。よかつた」

と繰返して言つてゐた。

京子は、その事よりは、興冷めて見える傍の安子の表情の方が、却つて氣にかゝつた。

京子は、少し口調を改めて、

「もう少し早く帰ればいいんだけど、電燈がついてから、安ちゃんが停留場まで迎へに行つてくれたんだぜ」

といつた。いくら引締つた感がしたのだらう。敏子は急いで頭を上げ、

「御免なさいね」

と、くるりと安子の方へ向き直つた。

六

二三日経つた夕方、京都の学校にゐる親類の青年が二人這入つて来た。彼等は時々宿りがけて遊びに来た。

あくる日は日曜日だつた。十時頃、京子は東窓からの眩しい光線に、目をさまさせられた。三方に一間づゝの窓があり、朝の内光線が座敷の眞中まで刺込むので、不用意にねてしまつた朝は、何時も甚い目に逢つた。起きて窓掛をひくのもうるさく、日陰へ顔だけ入れて寝てゐた。階下はまだ眠つてゐるらしく、ことりともしない。京子は暫く眼をつぶつてゐたが、眩しくて落ちついて居られず、起きた。窓を開放してから、階下に降りようとした時、安子の部屋の方で、人形の泣くやうな声が出た。降りて見ると、戸はみんな開いて、階下は晝だつた。京子は安子の部屋へ這入らうとして、襖に手をかけた。が、襖はかつちりと喰着いてゐて動かなかつた。中で忍び笑ひがする。京子は後の隙から覗いて見た。部屋の眞中へ二人の鏡台を持寄つてゐるのが見え、化粧最中の安子は肩ぬぎだつた。敏子は襖をつつかへて居るらしい。京子は力を入れてかつとひかうとすると、敏子らしい足音がばたばたと逃げた。

京子は、咽ぶやうな化粧品品の香の中へ、首をつき出した。

敏子は簞笥の陰へ頭をかくして居、他の三人は甘つたるい笑顔を揃へて、京子の顔を見た。恥しさうな安子の耳隠しが出来上つてゐる。前夜雀の巢のやうだつた伊一郎の髪は、櫛の目が真中から両方へ流れてゐ、十分癖がついてゐないのか、短いのが白い溝のそちこちにぴんぴんと立つてゐた。

京子は笑ひながら、

「これ敏さん見せていらん」

といつて、敏子の顔を覗きに行つた。敏子は頭を両手で抱込んで、くぐるやうに逃げた。これはまた、美事なオールバックに網をかけてゐた。

「ハ、、、」

みんな揃つて、お互をからかひ合ふやうな笑声をあげた。家ごと浮上つた若い笑声が、京子の氣持を甚く引立てた。彼等は観劇に大阪へ出かけるさうだつた。

若々しい騒ぎの中では、京子の血にも漣波が動き出す。

京子は手水を済してから、敏子の鏡の前で、顔を剃初めた。

「あなたのは、ここんと少しこんな風に捻じるとよきさうよ」

安子は京子の後に立ち、耳のあたりの髪を少し捻上げて見、

「私一遍結んであげるわ」

「さう、ありがたいナ」

安子が京子の髪を結び初めると、三人は傍から見、思ひの口入れをした。氣持が非常に柔いで、京子は其日ゆつくりと化粧などした。みんなの氣持も、それで甚く調子よくなつたやう見えた。

京子は縁に出て爪をつんでゐると、敏子が出て来、京子に、髪の恰好が甚く氣に入つたなど言つて、眞面目にほめた。そして微笑んで、

「これから何時もこんなにお化粧なさいね」

「少しは奇麗に見える？」

「え、あたし、こんなにお粧りしたあなたを本當に好きよ」

敏子は甘へるやうな恰好で、京子の手を自分の膝へ引張つていつた。

「ふだんの私はそんなにじじむさい？」

「さういふわけじゃないけど」

「可なりおしやれをするじやないかい？」

「ええ、そりやさうだけど。でもお化粧なさると、ずっと女らしく見えてよ」

「ハ、ハ、ハ、」

「ほんとに」

敏子は本氣な顔付で、眞面目に京子を見た。

「女だ。女だ」

京子は口の中で独言した。と同時に五六間も向ふへ飛びのいて、敏子の全形をはつきりと見た氣がした。

京子は矢張り淋しかった。

七

敏子は、可なり根の組んだ別な結婚問題を、郷里に持つてゐた。はじめ京子のところへ落ちつくことになつたのも、それを避けるためだつた。秦との交渉もそれがために渋滞し、其年の暮近くまでかゝらなければ、いよいよの話が決らなかつた。

京子は、初めの間に力瘤を入れすぎ、話の決つた頃にはうんざりして終つてゐた。しかし敏子が職を退め、郷里か

ら彼女の母が出かけて来、叔母が出かけて来、支度のため大阪通ひが始り出すと、京子の氣持はだんだんに落ちついた。落ちついて考へると、京子は自分も大したところへ踏込んだものだとしみじみ思つた。話が少し込入り過ぎ、ごてづき過ぎたもので、京子は、自分で言出し、自分で世話したことなので、全部の責任が自分にあるやう、いかにもそれが當然であるやう、感じさせられて終つたのだ。京子は、田舎から出て来た母や叔母から持かけられる相談を、眞面目に裁いて行かなければならない位置に、祭込められてしまつてゐた。その故でもあるが、京子は、式のため世間あり来りの習慣に、どれだけ禍されたことか。京子は、自分も案外通俗な人間だつたと、初めて自分の正体を見た氣のする時さへあつた。通俗の通俗なところに、いつかど人間の本質的な何かがあるやう、自分で自分の行為を、意味づけて見ることもあつた。

秦の方から日本鬻をと申込まれ、敏子の父母は尤もらしく快諾したのを見て、京子は非常に異つた世界を見せられた氣がした。若しそれが職業上のことだとしたら、京子は紅くなつて随分奮慨したと思ふ。けれども敏子の高島田を見てみると、未知の世界を見るべく精巧な望遠鏡を借見し

てるる氣がした。職を退め、平常の鬘をこはし、島田鬘をのせた女が一人生れて、家の中は何と景氣づいたことか。鬘一つ、隅の隅まで福々しく賑つた。

初めて鬘に結つた翌朝だつた。敏子は甚く不機嫌な顔をして起きて来、

「こんなところ痛くつて痛くつて」

と、枕の跡らしいところを押へながら、母親の前に不平らしくつつ立つた。一晚中、不安定な小枕の上のにつけた美事な鬘に擢廻されたのだらうと思ふと、京子は苦笑せず居られなかつた。

「どつちへもこつちへも曲げらりやしないことよ。ほら斯んなにかたアくなつちやつて」

「さりやさうよ。結び初めにや誰でもさうやつて辛抱して来たんじやもん」

「今時そんなことに辛抱なんかする人はありやしないわ。いいわよ、怒つたりしたらこの次から決して結はないから」

「ほいやてお前……そんならそ、向ふおむき。そッ」

さう言つて、母親は敏子の首を揉んでやつてゐた。

敏子はその鬘を、よく高いところへ知らずにうちつけ

た。その度に母親は、

「ほらまた」

と、いかにもお轉婆娘を叱るやうに言つた。

「だつてお陰で自分の高さが見當つかなかつたんですもの。物騒な話だわ」

「ほやさげに、鬘に結うたらちつとは腰を低うするもんじやと言うてるじやないかへ。ハイカラに結うてる時のよに、ぴんこしやんこ胸つき出してるさげじやないかへ」

「い、わよ敏さん。式の前日にはお母さんにどこもかも下検分をして貰ふことだわ。そして少し高い所へは、目立つてはつきりした物をぶら下げておいて貰ふんだわ」と、安子はからかつた。母親は笑ひながら、

「是非とも持たせにやならん物が、もう一つあるよ」

「なに？ 小母さん」

「薄荷か唐芥。眠気さましさ」

安子はふき出した。敏子は鬘になつてから、よく居眠りするやうになつた。その話が出ると、敏子は鬘の故でよく眠れないからだと本氣に辨解した。それがまた面白いことの一つとなつた。

京子は母の四十七歳の時に生れた。母は京子の鬘を見て

死にたいと口癖に言つた。京子も美しい鬢を母に見せ、死なせたいと思つた。京子は少女の頃、縮れた自分の髪が甚く氣になり、それを直すことが孝行だなど考へたことがあつた。その頃京子は、一生も用へる程美男夢を刈込んで來、陰干にしたことがある。ある觀音に心願して、鰻を断物したこともある。しかし曲毛はとうとう直らずに、時代は却つてそれに意味づけるやうになり、今ではあはて者の白髪が、動かせないところへ、京子を連れて行つてしまつた。京子の母は実に長生し、京子の変つた鬢を見て死んでいつた。鏡台の前で、敏子の鬢を直してゐる敏子の若い母を見てゐると、京子は涙ぐましい感じがした。

敏子の頬には、にくい程魅力のある大きな笑窪がある。それ以上に口のあたりは愛くるしかつた。敏子はその唇を少女のやう僅か巻込んで物を喰べた。敏子は甘へた氣持でゐる時には、その口許へよく御飯粒をくつつけ、くつつけては手の甲で品よく口中へなすり込んだ。女学生の頃には、可なり評判のいい娘だつた。しかし、職を持つてゐる中、敏子のその美しいものが、殆んど目立たなかつた。甚くけばけばしく見えることがあつたり、非常に暗いものに見えることがあつたり、涙ぐましい程冷く角張つて見える

ことがあつたりした。それが今再び伸々と冴えた姿に変わり出したのだ。それを見るにつけ、京子は、仲間のために何かしつかりした事を言はなければならぬやう、力応へを感じた。働くことが男、女、を穢くするのではない。人間の働きが金額で換算されるが故に、人々は男らしさ、女らしさの美しいものを失つていくのだ、といふ風なことを、今更眞面目に誰かに話したい氣がしたりした。

とにかくにも、身体のかなし方といひ、敏子に日本鬢はよく似合つた。どういふ形でもいい、似合ふものを持つ間は、女は矢張り地上の花である。京子は敏子の簞笥へ、一枚でも多く美しい着物を入れてやりたい氣がした。式が済んでからまで日本鬢であるかどうか、品のいい笄を、敏子の鏡台へいくつも入れてやりたかつた。

敏子は何時のまにか、両の袖を胸の上に重ね合せ、品をつくり習つた。紙雛！紙雛！京子は敏子のその姿を珍らしさうに眺めては苦笑した。

當日は午前中に神前の儀式を済ませ、午後は披露宴で、宴なかばに敏子達が旅行に出る予定になつてゐた。さし迫つた前日には、敏子のために郷里から大勢の男女が出かけ

て来、京子が案内して定めの宿についた。

その夜のことだつた。早くから寢床につく心算であるが、それはそはとした仕事の後から後から出て来て、夜中近くなつても片附かなかつた。其の間に敏子はすつかり無口になつて終ひ、とうとうやけに寢床を引張り出して、一人で寝てしまつた。敏子の母は包み物を折りながら、

「敏、敏」

といつて、敏子の部屋をのぞきこんだ。母は京子達にずるぶん氣をかねてゐるらしく見えた。

「フ、、、、」

敏子は蒲團の中から、押しつまつた笑ひ声を出した。

「厭な子。お前何してるのよ」

暫くして、敏子は鼻を擧り出した。

「敏」

「ビ、、、、」

「お前何してるのよ」

敏子の笑ひ泣きが、とうとう本物にかはつて終つた。敏子は声を上げて、さめくと泣いた。

「まあお前。何故よ。何か氣に入らんことでもあるのかへ」

母は焦々してゐた。様子から察して、敏子の泣くわけが

京子に解つてゐた。京子は氣の毒に思ひ、

「小母さんは、結婚の前の晩に泣かなかつた？」

と聞いた。

「さあ泣いたりなんぞしやすまいよ。昔のことじやさけにもう忘れたけど」

「それだけ小母さん達の娘時代は、目が荒くて済んだわけね」

「さうかへ。今時の娘はみんな泣くのかへ」

「ハ、、、、」

「さうかへな。そんなら其積りでわたいももう寝ましょ。そやけど泣くのとていふものは、餘り縁起のええもんじやないわの」

家の中はしんみりとし、間もなくそれぞれ寢床にはいつた。

其夜は、敏子を眞中にして、京子は安子と三人で列べて床をのべた。

「結婚の前夜つて、こんなに淋しいもんでせうか」

敏子はそんなことを話しかけて来た。しかし、その話は油の乗るところまで進まない間に、京子は疲れて眠つてしまつた。

敏子達の旅行は、とうとう夕方近くなつて終つた。京子は秦や敏子の母達と一緒に、敏子達を駅まで見送つた。出て行く二人は、すっかり見かはして美しく立派だつた。京都行の二等室はがら空だつたが、二人はその中で數尺はなれて席をとつた。それが氣になるらしく、

「少し寒い様だから、コートを着せておやりな。風邪をひくといけないぜ」

と、秦の母は秦に注意した。秦は人事のやう聞流しながら、

「ええ、ええ」

と、重ねた返事をして、よそを見た。

汽車が滑出すと、二人は三つばかり離れた窓から別々に顔を出して、京子達に挨拶した。走出して十分。汽車が木津川の鐵鐵テツを通る頃には、一つの窓に顔をつき合せ、暮れて行く水、山の姿を話題に、甘いあこがれをぼつりぼつり語り初めるのではあらうけれど――

朝早くからの騒ぎに、其日京子は少し疲れ過ぎた。改札口を出るとほつとして終つて、物言ふのも億劫だつた。帰

る道々彼女達は、いかにも内裏雜のやう澄込んでゐたかいつて、敏子達の噂をして喜んだ。しかし京子には、それ程嬉しい感も起らねば、淋しい氣もしなかつた。只それは――と落ちつかず、茫然と自分の足の運びを見つめながら、足を運んでゐた。

京子が家について間もなく、敏子方の人々は、京子のために乾盃をあげようといつて、つめかけて来た。それで凡ての人々の心に一段落がつくのだ。京子は宵から寝ようと思つてゐた矢先だつたが、機嫌をとりかへて受けることにした。

乾盃がすむと、田舎の人々は其日の見聞を持寄つて、高い声で談笑しはじめた。田舎の人々はさういふ場合に喜びを執拗にする。京子は暫く對手をしてゐたが、すぐ倦きた。京子は話の続く間、どこか明るい街を歩いて来たいと思ひ、それとなく氣輕に席を外した。

露路を出て見ると、アルコールの故で、街の電燈が霞んで見え、家や人々はとほとほと動いた。ほどけたやうな氣持が、急に頼りなくなつて来た。一人で黙つて歩いてゐるのではなく、友達をつかまへて大きな声で話しかけるか、歌でもうたひたい氣がして来た。黙つて放つておいたら、

きつと活動写真の立見でもしたと思ふ。一町ばかり歩いた時、京子の足は角を曲りK子の家の方へ向いてゐた。

K子はi子のところへ出かけたと言つて留守だつた。其頃K子はピアノに倦きたといひ、i子とi子の下宿の内儀さんから、三味線の稽古を始めてもらつてゐた。京子は急に其方へ氣をとられて、i子の家を訪ねた。i子の家はすぐ近くだつた。

二階で三味の音がしてゐ、階下は留守だつた。行き慣れては居り、京子は一人で二階へ上つて行つた。京子が這入つていつたのを見て、K子は、

「もう済んで？お疲れさま」
といつて弾きやめた。彼女達は三人で弾いてゐる最中だつた。

「いらつしやい。疲れたでせう」

i子も弾きやめ、机の傍の火鉢から鐵瓶を持つて来、茶を入れてくれた。内儀はその日の話を聞きたがり、敏子の奇麗に出来てゐたことを賞めたてたりした。しかし、京子はその話はもうしたくなかつた。

「その話はどううんざりしたよ小母さん。それよりは今の続きをうたつて頂戴」

と京子は言つた。喉がひからびて、茶よりも水を欲しかつた。いくらか落ちつきを失つた京子の様子を見て、K子はすぐ氣づいたのであらう。言葉をくづして、

「アれ。少し調子がどうかしてゐるぜ」

と、くりつとした目を京子の目に向け、からかふやうに微笑んだ。京子はその朝、美容院から支度に来た女に髪を結んで貰つてゐたのだが、K子のその微笑を見ると、直覺的にそのことに氣づいた。京子は後毛をわざと無造作にかきあげ、笑つてゐると、K子はいかにも変つたものを見つけたらしく、苦笑した。

京子は其夜十二時近くまで、彼女達とうたつて歸つた。

九

敏子と入れかはりに、京子はそれも郷里から若い書生をやとひ入れた。中学卒業後不幸に逢ひ、青年らしい獨学生活を続けてゐたもので、ある時間は大阪の外語に通はせ、ある時間は京子の仕事を手傳はせることにして呼んだのだつた。どちらのためにも事情は好都合だつた。青年は実さきびきびと働いた。

「青年はいい。若い女の世話はどうこりこり」

と、京子は今更のやうに言つた。京子の生活は、それで一段と活氣が出た。

「男の子は矢張り骨惜しみをしないからいいわね」

安子も、家の中の掃除が行届くといつて喜んだ。

其後、敏子達の新しい家にも、京子の家にも平穩な日が続いて、秋が来た。

或夜のことだつた。安子は早くから寝てしまつて、京子は更けるまで仕事をしてゐた。すると、表の方で不意に慌しい女の声が出たやうだつた。平常さういふことが減多とないので、京子は一寸どきつとした。続いて書生の声だし、戸を開けるらしかつた。京子は立耳してゐた。訪ねて来たのは敏子らしかつた。敏子は何か言ひながら。眞直ぐ二階へ上つて来た。餘り突然なので京子はいひ予感を受けなかつた。敏子は甚く興奮してゐる様子で、泣いたらしく、目のあたりがぼてりとしてゐた。

「どうしたの?」

京子は少しせき込んで聞いた。敏子は向ふ意氣強く来て、京子の傍へずしんと脛をついて坐り、いきなり京子にすがりついて泣入つた。

「喧嘩?」

敏子は泣きながら首をふつた。

「お母さんと?」

敏子は同じ答を繰返した。

「じやどうしたの?」

「あたしもう故郷へ帰らしていただく」

敏子は早口に、焦々しく答へた。

「馬鹿よ。それ程のことができてゐるのに、なぜ黙つてゐたの?」

「だつて」

「秦さんは?」

「店」

「秦さんとはいひんでせう」

敏子は少し落ちついたらしく、身体を起した。そして涙を拭きながら、泣きじやくりに混せて、紛らはしくうなづいた。

安子は目を覚まし、寝巻の上に羽織をひっかけながら、上つて来た。

「何事なの一体?」

「お前ここに来たことを、秦さんはお存じなのかい」

「知つてゐるでせう。別に何も言はないけど、出て来がけに

森下(番頭)が見てゐたから」

「——」

「だつて私なんかどうなつたつていいわ」

餘程のほせてゐると、京子は思つた。

「秦さんではないのね」

京子は念を押した。敏子は先刻のやうに曖昧にうなづいた。

「毎日お客ばかりで、がさがさがさとして、ちつとも落ちつかれないんですもの」

「それはお前の意志で、好んで同居してるからじやないかい」

「だつて、ごじやごじや〜〜するんですもの」

「可笑しいねお前、そんなことで飛出したりしちや軽率だよ」

「もう、うるさいの。ぐじやぐじや〜〜して。私もう故郷へ帰る」

「帰つたつていいけど、ぐじや〜、がさ〜言つてただけじや仕方がないぜ敏さん」

京子も、一寸手のつけ様がなかつた。京子は、はつきりと言難いことで、何か致命的な問題が起つてゐるものとよ

り、察しやうがなかつた。それには秦の行儀に疑ひをかけて見るより他になかつたが、それ程興奮してゐるものを、下手にいぢり廻してもと思ひ、兎に角其晩は京子の家へとめることにした。京子は秦のところへ手紙をかいて、来てゐるといふことだけを、簡単に知らせた。秦からの返事には、二三日ゆつくりさせてやつて欲しいといふこと、郷里へは知らさずに欲しいといふことが書いてあつたが、言葉つきから見て、二人の中に何かありさうには思へなかつた。

あくる日京子は勤めに出たが、敏子のが氣にかゝり、空時間に帰つて見た。

敏子は、いかにも大病人らしく床についてゐ、秦が来て枕許に坐つてゐた。

「どうしたの一体？離婚沙汰にしちや少し早過ぎやしないの？」

京子是从からかひ半分に言つた。秦は極り悪るさうにいつと笑つたが、すぐ表情をかへて別な話をしかけて来た。何のことだか京子には一寸見當がつかなかつた。

帰る前になつて、秦は敏子の顔を覗込んで、

「じや、二三日遊ばして貰ふか。ね？どうする。それとも

晩に迎ひに来てやらうか」

敏子はふくれてゐて、答へないらしかつた。京子は少し擦つたい氣がした。秦は京子の方を向いて、穏かな表情で、

「月末で少し忙はしくしてしますので、二三日ゆつくりさせてやつていただけますか」

「いいとも。でも夫婦の仲のことは、私には一寸見當がつきにくいから、いい時分にあなた迎へに来ておやんなさいね」

秦は笑ひながら、

「ええ、どうぞよろしく」

と、商人風な返事をして、歸つていつた。

秦が出て行くと、敏子はくるつと起上つて、割合明るい顔で、少し細かい話をしかけて来た。女中の一人が横着者らしく、そのことが敏子の家出の直接原因になつてゐるらしかつた。それだけでは話は少し馬鹿氣^暫けてゐたが、何れにしても大した心配のいる程のことではないやう思はれた。

其晩、秦の父から京子へ手紙を届けて来た。それには、平常仕事に追はれて、敏子ともゆつくり話す機会が少く、

残念に思つてゐる。今度のことも自分には餘り突然なので、不行届を心ひそかに詫びてゐるが、自分は斯ういふことは、ある程度までは、あれ等二人で解決して貰ひたいと思つてゐる。といつて、自分も知つておかなければならない話なのに、一向筋道の立つたことが解らないのも、氣持が悪い。今度のことは折を見て、敏子とゆつくり話合つて見たいと思つてゐるが、とにかくさうしてゐたのでは面白くないから、我慢して今晚中には是非歸つて来るやう申聞けて貰ひたいといふ意味のことが、解りよく書かれてあつた。感のいい手紙ではあり、京子もそれをひそかに待つてゐた折だつたから、よく話して、敏子に歸りを促した。

「じゃ何と言つて歸つてくのよ。極りの悪い」

敏子はもう泣いてゐなかつた。

「だから無断で家出なんかしないことよ」

「だつてじつとしてられなくなつて来るんですもの」

「奥様の短氣は眞平だぜ」

「だつてねえ？」

敏子は安子を味方に入られるやうに言ひ、

「一人じゃ困るわ」

と、甘つたるい顔をした。

「やれやれ、極りの悪いこと」

安子は笑ひながら言ひ、立つて鏡台の方へ行つた。

間もなく敏子は安子に送られて、帰つていつた。京子は思出しては、一人で苦笑した。しかし、これには何か底に沈んだ事情がありさうに京子は思つた。

そのまゝ、平穩な日が一ト月ばかり過ぎた。ある夜だつた。京子は用先から帰らうとして、人力で敏子達の店の前を通つた。何時ものやうに、京子は店を覗込まうとした。すると敏子は、店の出口のところに寒さうにしよんぼりと立つてゐた。人通りがめつきり減る季節になると、十時過ぎると奈良の街はひつそりと寒かつた。敏子はいかにも倦怠を感じてゐるらしい様子で、外を眺めてゐた。

「敏さん」

京子は快活に声をかけた。

「あら」

敏子は小走りに追つて来た。京子は車をとめさせた。振向いて見下すと、敏子は両の袖口を喉のところへ重ねて組み、鼻から下をその間へ埋めて、上目づかひに京子を見た。敏子の目に盛上つた涙が、電燈の光線を斜に受けて光つてゐた。

「また泣いてるな」

京子は、何か不吉なものが、一日一日自分の家へ近づいて来てるやうな予感を感じた。

「私も一緒に帰る」

「さう?」

「いいでせう」

「ええ。じゃ一寸さう言つてお出でよ」

「——」

「ね、さうなさい。私降りるから一緒に歩いて帰りましよ」

「——ええ。じゃもう止める。また明日でも」

「さう?」

敏子は悄氣込んでうなづいた。氣がかりだつたが、それで別れるより仕方がなかつた。夏中軽くしてゐた鬘を、敏子はその頃丸鬘にかへてゐた。

待つてゐたが、四五日過ぎてても敏子は来なかつた。京子の方から三度ばかり訪ねて見たが、客があつたり、案内明るい顔をしてゐたりして、其夜のこととはつきりしないなりに過ぎた。

正月になつてからである。

或日、秦がゆつくり遊びに来た。其日京子は一人で二階にゐた。秦は話好きなので、京子と火鉢を囲むと、疲れる迄話することがよくあつた。だが、其日話は一向その方へは向かずに、秦は自分の繪のことや、商賣のことを話した。秦はいやに落ちついてゐた。

「この頃詩は？」

京子は聞いた。

「矢張り白熱期は駄目ですね。烏頂天になつて、妻に恋してるやうな間は詩なんて出来ません ハ、ハ、ハ、」

京子は一寸馬鹿らしい氣がした。

「あなたの内は随分可笑しいのね？」

「なぜ？」

「だつて奥様は泣いてばかり居るじやないの？」

「はアあれ、あれには私も参りましたよ」

その時安子は外から帰つて来、二階へ上つて来た。安子はそそくさと肩掛と手袋を脇において、

「暖爐を焚けばいいのに」

と言ひながら、火鉢の上へ手を出した。安子の鼻の先は紅く、目は寒さにうるんでゐた。

「京さんつたら、だんたく氣が重くなるばつかりね」

安子は京子の顔を見、火をひろげた。

「敏さんこの頃どう？」

「今もその話が出てゐたところなのよ。で（破損）（も）この頃はいい様ね？」

「さあ、もう直りませう。でも昨夜は帯の上からたたいたりして、ぶんぶんやつてました。どうも閉口してしまつて。元の通りにして返せなんて言ふんですからね。ハッハッハ、ハ、ハ、ハ、」

「道理で」

京子はうつかりしてゐる間に、安子はちゃんと氣づいたらしく、軽く手を打つた。

「この間お母さんと杉山さん（産科医）のところへいらしたとか言つたわね」

「あれが言ひましたか」

「い、え。この間私一寸お見舞したい人があつて、杉山さんへ行つたんですよ。その時間聞いたもので、どうしたのかと思つてたんですよ。私あなたに言ひませんでしたか」

といつて、安子は京子の顔を見た。

「xuu?」

(以下欠)

【解説】

執筆時期 此作はB4版20×20の400字詰め原稿用紙に書かれている。商標、所属などの一切ない原稿用紙で、これと同じ用紙に書かれた未発表作品に「落葉」がある。「落葉」は、「京子」という女教師を主人公に、自由主義教育の評判や限界、子供雑誌の廃刊の経緯などが書かれており(奈良女高師附属から出されていた子供雑誌「伸びて行く」は小菊の赴任と同時に大正十年に創刊され、小菊の退職する年度の昭和二年十二月号を以て廃刊された)、同時に、「山崎」という主事と教員間の対立は、木下竹次と池田小菊の教育観の相違を投影している^①、女教師に対する当時の人々の偏見批判や病気のこと——例えば女教員に対してだけの半人前の増俸については、戦後に復刊された「学習研究」5号に掲載された小菊の「私の教員時代」にも、時期はずれているが、略同主旨で回想されているし、病気については、昭和四年刊行の『子供と綴方教育』などに具体的に触れられている——等は、退職直後の、小菊の感慨として読めるようなものである。従つて

「山崎」に対する批判も幾分緩和されて、複眼的に描かれている。それと同じ原稿用紙に書かれている「朝顔」の主人公も「京子」という女教師であり、女三人で営まれている「家庭」的雰囲気の中でシスターリットの姉妹愛や、婚期を逸した「職業婦人」が抱く世間の偏見などに対する懸念などは、「落葉」と同じく、当時の小菊の本音らしく書かれていて、両作品が近接して書かれていることを証している。断定的にはいえないが、恐らく昭和三年頃、「りずむ」の第四号、第五号に掲載した「淋しき存在」、「彼女の犯罪」という小説執筆以前に、自分の奈良での教師時代を、退職時の、執れずアシズムへと傾斜していく時代の、自由主義教育への圧迫や、家族・社会観のデモクラシーから国粹主義への転換への危機を背景に、取り敢えず、自己の教師時代を総括するような意図で書かれたものと思われる。

戦後に書かれたとおぼしき自伝的な、「小説の神様」の草稿である「九輪草」には、当時の状況、雰囲気を次のように回想している。

昭和三年四月、お淳は三十五才(実際は数え年三十七才筆者注)にもなつて、病に倒れ、はるかな彼方に作家という霞のような希望を抱いて、慣れた職場を離れたときは、しかし、無量の感があった。お淳は、この七年間に、同性愛と異性愛の、二つの愛情の噂をたてられた。

同性愛の相手はM・K子で、異性愛はS・Sという、理論好きな、評論家タイプの同僚であった。Sは、石川縣の産で、妻子を郷里において来ていた。その妻のところへ、何かつまらぬことを密告したものがあつたとか。妻がはるばる様子を探りに来て、參觀人と見せて、お淳の教室にはいったという話もあつた。

また、当時、本校の寄宿舎は、胸の病氣と同性愛の巢窟だと、悪口するものもあつて、事実、彼女たちのあいだで同性愛が流行していた。その彼女たちが、三学期になると教生になつて、附屬へ教員の実習にやつて来た。

或る年の教生に、目立って仲の良い組があつた。木下教授が氣にして注意したらしい。すると、冬休みに、二人は旅行先から連名で年賀状をよこしたらしい。木下教授は当てつけられて不愉快だったのか、そのことを教官會議に話した。

それは、お淳とK子への警告でなかつたかも知れない。が、二人は噂にのぼつていて、その日も列んで席についていたので、お淳は具合わるかつた。

お淳がふざけた顔でチラとK子を見ると、K子も皮肉な目付きで見返した。女は五人で、二人は一方の端にいて、席がちょうど木下教授と向いあわせの位置にあつた。

二匹のツバメが眼で合図しあつた様子が、皆を面白がらせ

たのか、要らぬおせっかいをして、木下教授が連名の年賀状を当てつけられたのが、愉快だったのか、S・Sもその席にいたのだし、もつといろいろ、複雑なその場の空氣が自然にそうなつたのだと思う。

「うは、、、」と、皆が声をそろえて笑い、お淳たちも笑つてしまつた。

面白い話題があつた。冷い男だという定評の木下教授が、案外な服装凝り度で、ネクタイも舶来の上等ときどきかえて来た。赤珊瑚のカフスボタンをはめて来ることもあつて、それが女たちの眼にとまつていて、一度話題になつて大笑したことがあつた。

すると、或る日、教官室の掲示板に、木下教授の家に子供が生れたと書いてある。末子だといつていた男の児が、小学五年生に来ていて、皆も今ごろ木下教授に赤ん坊ができると思はなかつたので、これは愉快なニュースであつた。

「学習原論にハネがはえて、主事も一ぶくつてところだよ」
なごやかな話題が流れて、木下教授が急に暖いお爺さんに見えだした。

教授が會議にその話をしたのが、またちよつと、その当時であつた。折柄のことで、話全部がそこに結びついて、皆をそんなに罪なく笑わせたのかもしれない。會議には珍しい朗

かな風景であった。

お淳は、今そのことを思出しでもほ、えましい。

ここに描かれている「木下教授の家に赤ん坊」が生まれたことは、「落葉」冒頭に書かれているし、同性愛・姉妹愛の問題は、「朝顔」において、「敏子」の「京子」への想いとして引き継がれている。こういう愛情表現が、大正末から昭和初期にかけての、アメリカニズムや、既成の家族・社会観などの行き詰まり・崩壊に見合っていただろうし、例えば吉屋信子の「花物語」（大正五年から十三年『少女画報』）の評判とも関連していたかも知れない。「朝顔」という題名にも、それは感じられる。戦後の「私の教員時代」が、昭和三年頃に執筆して、残っていた「落葉」という原稿を利用しながら、「九輪草」でも回想されているらしいことを考えると、昭和三年当時の小菊の関心——婦人の社会進出という時勢や職業婦人に対する社会の偏見が、既成道徳への批判になっっているし、同性愛・姉妹愛をとりあげることが、自由主義教育を阻害する元凶と関わって記されている視点などは、自分の生き様として、また教員として育ててきた生徒等の新しい価値観創造の象徴としても省察されていると思われる。

同性愛については、明治末から雑誌等にそれに関わる記事が多く登場している。伊藤銀月「女学生間の悪傾向」（明治四十一年三月『女学世界』）は、「女学生間に見る相愛の關係」を新時代の

自我の目覚めと絡めて論じ「今日のやうな自然を求むるに熱心なるの余り、却つて不自然に陥ることなど、一切跡を絶たしめなければならぬ」と述べている。また、女学生同士的心中など世間を騒がす事件も起きている。奈良女高師においても、大正九年、門限を破つて音楽の女教師のもとを訪ねた二生徒が退学処分となり、教師と生徒間の同性愛として取り沙汰され、複数の雑誌に論評が載っている。「未婚婦人に多い熱烈な同性愛」（大正十年十一月『主婦の友』）では、女教諭同士の同性愛を取り上げ、「婚期を失した女性の寂寥」が原因と述べている。同性愛への、心理学や精神医学からのアプローチの記事も多く見られる。こうした状況の中、独身の女、女同士の共同生活をあえて素材として取り上げたところには、この時代に生きる女性の生き方の模索への意志を見て取ることができよう。

作品の素材「りずむ」創刊号の解説でも引用したが、大正十年、奈良女高師附属小学校の訓導として赴任した池田小菊の住居については、戦後執筆の「心境」〔教師を辞める〕とにも、「私は赴任当時、先輩の同僚が、自分の家の隣の浅田重教という家の二階を、私のために借りてくれていて、そこで一年ほどおいてもらった。（中略）次ぎに、近所に手ごるな家がある、そこへ移つた。東京一つ橋の鳩山女子職業学校を出て、郷里の女学校で教員をしていた安子（小菊が同居し、後、養女になる木村一枝のこと

「筆者注」が、奈良に來たい希望があり、浅田先生が口を世話してくれた。(中略)父が世を去つたのはこの家のときであつた。／三度目に移つたのが、今のこの家だから、母を亡くしたときはこの家に住んでいた。やはり郷里のもので、東京和洋を出たのが就職口を求めて来て、安子が自分の勤先に入れた。そこで、一族がまたふえたのだ。」とあり、事実の詳細は確認できないが、恐らく浅田家での生活や、三度目の住居での「東京和洋を出た郷里のもの」(作中の「敏子」)の結婚に纏わる、三人の女所帯に対する小菊の経験が此作の素材だと思われる。最初の住まいの大家である浅田重教は奈良県師範学校教諭で、「神経質な細君」(二一章)として登場する浅田の妻は、国語学者大矢透(一八五〇—一九二八)の次女なつ子である³⁾。

婚期を逸した「京子」と姪の「安子」、そこに同居した従妹の「敏子」の、姉妹愛から結婚に至る迄の経過を軸に、妙齡な女性とそれをめぐる周囲の中年独身女の心理変化が描かれている。これが事実であると仮定した場合、作品の年立は曖昧だが、恐らく大正十二年から同居、大正十五年末の結婚、翌年秋の悪阻・妊娠を経て、翌昭和三年の正月で、主人公が「敏子」の妊娠を確認するところで、散逸、未完になっているものと予想される。従つて執筆は、昭和三年頃と推測できるのだが、その年立の事実として明確にできることは、四章はじめの、題名にもなっている「朝

顔」に関する記述が、小菊が、為藤五郎によって創刊された「教育週報」の第六十三號——大正十五年七月三十一日発行——の「夜更しと朝寝、晝寝の話 諸家の生活記録」に寄せた文章と、一致しているからである。やや長いがそのまま引用する(「朝顔」の四章と、以下の筆者の付した傍線部に着目してほしい)。

奈良女高師訓導 池田小菊

晝は働きに出なければならぬのと、落ちついて考へごとをするには夜がいゝ、のどで、私は殆ど毎夜、夜ふかしをいたします。夜ふかしといふよりは、夜起きて考へごとをしますといつた方が當るでせう。そんなもので、學校からかへつてお湯をすますと、特別な用事のない限り、夏でも冬でも、きまつた様に三時間ばかり睡ります。つまり一回に續けて眠る時間數を二回にわけて眠ることになるのです。一日の中、夜の十時頃から朝の三時頃までが私にとつてもつとも楽しい時間です。土曜だと大抵の場合夜あかしをいたします。夜起きてゐると氣候のかかり目が、實にはつきり解る様な氣がします。八月二十日頃になると、どんな蒸暑い晩でも、朝の二時頃になるときまつた様に涼しい風が窓からふき込んで來ます。秋が來たなと思ふと、うれしくて、わざ／＼その時分まで起きて待つこともあります。さし當り旅行の豫定もない夏休みには、朝六時頃床について十時頃起きます。そして一時

頃までがさくして、五時頃までねます。それから朝までがとにかく帝王になつた氣持で二階に上ります。夏休み中續けると、いかにも顔の色は悪くなります。しかし、少しつきつめた考へごとをするには、矢張りそれでないと私には都合よくありません。夜起きることは、六、七年も續けて來た習慣です。

今年は夕顔は駄目でしたが、朝顔だけはものになりました。夏は朝顔づくりがたのしみです。夏の朝は三時すぎると白みですが、朝顔の大輪はその頃になると開きます。夕方起きて行水をすませず時分に夕顔が開きます。今年は二階の東窓にかけてしをしましたので、朝顔は可なりよく育ちました。

何事にも無器用な、ひたむきな私にはかうした生活が一番適當してゐる様です。

「敏子」のモデルについては、未定稿や「日記」などで確認はできないが、小菊の御弟子である武田好昭氏にお尋ねしたところ、「敏子」に重なると思われる女性は、一枝と同じ東京の専門学校（技芸Ⅱ和裁全般）を卒業し、結婚して油阪（J.R奈良良駅前）の通りと登大路の交差する油阪交差点の近辺が当たる）に住んでいたという。結婚相手は大手新聞社に勤めていたという。小菊の晩年まで親しい行き来があったとのことである。武田氏の記憶では小太りで朗らかな女性だったそう。お話の女性が敏子のモデル

ルとすると、実在の身近な人物をモデルとしつつ、同性への恋愛結婚という問題を描くにあたり、結婚相手の職業などに改変も交えて作品化していったものと考えられる。

小菊の綴り方教育・小説観について 教育学者・中野光の『中野光教育研究著作選集 第一巻 「教育空間としての学校」』に「池田小菊——もう一つの「学習」を求めて」があり、そこに永田与三郎編、大正十五年出版された『大正初等教育史上に残る人々と其の苦心』に、池田小菊が「教育の魂に触れるまで」と題して一文を寄稿していることが記されている。その中に、小菊の作品執筆の動機が次に引用されている。

「自分が小説がわかり小説がかけるからといって、自分は作家だとも文芸家だとも思つてゐない。もと／＼自分の小説は作家志望でかいたものではない。只、試験を受けて見る氣持で、『帰る日』を発表し、その後ひき續いて作品の発表をしてゐるに過ぎない。どの位うまくかける様になつたかを試すつもりではない。自分の見つけてゐるものが、嘘か本当か、自分をつき放して、靜かに自分を見詰めたいからである。だから、自分の今まで発表してきたものには、一篇も間に合せな駄作はない積りである。愚作ばかりではあらうけれど、駄作はしてゐない積りである。本当の自分を打ち込んでかいてゐる積りである。とにかく、一作毎に、それだけ自分

は本当の教育者になって行きたいと思つてゐる。」

所謂大正デモクラシーの時代に、教育界では、それまでの「教授法」にかわる「学習法」が流行し、生徒の個性を伸び伸びと成長させることに意が注がれるようになった。小菊が奈良女高師の附属小学校の訓導に赴任したのは、「学習法」を積極的に取り入れようとしていた主事・木下竹次の招きによつてである。上からの教授・訓練・養護を児童生徒の自律的な学習に転換させること——それは白樺教育運動とも連動しながら、長野、茨城、千葉師範などでも試行された（『昭和の歴史1「昭和への胎動」金原左門著参照）。大正七年の『赤い鳥』創刊や自由画教育などとともに、教科書のない綴り方が、最も自由に、子供の成長がはかれる教科であることが、女高師附属の訓導になつてからの小菊の確信であつた。勿論いろんな条件はあつたであろうが、「伸びて行く」での創作や大正十四年の東京・大阪両「朝日新聞」に掲載された「帰る日」の発表、さらに学習法の実践や論文、子供の綴り方指導の出版などが、当時の教育界では、小菊を闺秀作家としても注目していた。そんな中で書かれたのが、右の文章である。同じような主旨は、「朝顔」「落葉」執筆とそう隔たつていない時期に執筆されたと思われる『子供と綴方教育』（昭和四年刊）にも、子供の綴り方指導として記されている。

一体に文章は、その時その時の、自分の情熱を盛る器であ

る。だから、或る期間が経ち、熱が冷めてから、その文章にもう一度當つてみた時、自分自身の姿が、よく解る。作品の中の自分を、まるで他人のやうな冷かな目で、眺めることが出来る。割増しもなく割引きもない、正しい批評を、自分の心を下すことが出来る。綴方は人を育て、人は綴方を育つ。苦しみも多いが、これ程愉悅に富んだ仕事は、恐らく他にあらまい。綴方教育こそ、教育中の教育だと思ふ。

子供の綴り方指導と、小菊の小説観が重なつてることが注目されるし、そのように育てた生徒に対して次のようにも述べている。

彼女達を育てながらも、私の心は何時でも、社会的によき仕事の出来る、明るい感の、若い新妻の姿を想像に描いてゐた。今のモダンでは眞平だと思ふ。頭の固い今の職業婦人も困り者だと思ふ。心の調和を失はずに育つた者だけは、職人になつても、女房になつても、女中になつても、その場合場合を、すねずに切り抜ける裁きのよさを持つたらうと思ふ。私はさう信じてゐる。

学習法時代の、綴り方指導者・教育者としての小菊の姿勢だが、子供の個性を素直に伸ばすことに生き甲斐を感じる。このような姿勢が、しかし小菊の小説観と重なる時、必然とともに、或る限界をも感じさせる。端的にいえば、昭和三年当時、文壇で流行した

新感覺派やプロレタリア文学の観点の本質を考えているのではなく、「私小説」の理念が安易に骨子になっていることである。震災後の大正十三年の六月と十月に創刊される「文芸戦線」と「文芸時代」が、中村光夫の『風俗小説論』によれば、「私小説」の社会性と仮構性の欠如を批判するものとして登場した新文学運動であったのに対して、批判された「私小説」の観点からしか記されていないことである。教育界の学習法への転換が、白樺派の影響からも導かれた側面があり、そのように考えると、教育者であったことの限界とも言えるし、小菊が志賀直哉に師事する必然性とも言えるのであるが、「私小説」への批判の観点が、文学史的に考えれば小菊に欠如していることである。「朝顔」に書かれている「家族」の世界が、新しい人間・社会関係を模索する、そういう価値観の転換期でありながら、どこか創造性に欠けた、所謂「私小説」的観点に終始している気味があることである。仮に小菊の「本当の自分」がそこにあるとしても、そして単なる自足ではなく、複眼的に描かれているにしても、所謂文壇小説として此作を眺めた場合には物足りなさがあり、単なる私事である教員時代の総括で、習作的な感じを禁じ得ないのである。志賀直哉を中心とした尾崎一雄や網野菊、小菊の作品が戦中、「奈良派」と称されていたのもそのせいであろうが、小菊の姿勢は、一時プロレタリア文学への傾斜を示したり、志賀批判を漏らしたりはする

が、結局「自分の見つめてゐるものが、嘘か本当か」を見つめることに終始し、「本当の自分を打ち込んで」書くという姿勢は、最後まで「私小説」的な観点からは逃れ得ない限界を持っていたことが、露わになっている作品と言えそうである。

限界はあるとして、この未完の習作の意義を考えてみるならば、それは、三人の女性を通して、女性の愛の形態、結婚、妊娠（身体）の問題、すなわち、女性の生き方の問題が展開されようとしていた点だろう。また、作中において、女性同士のくらしの中にも発生するいわゆる性別役割分業が描かれている点も興味深い。そうした中、「敏子」の今後がどう描かれるかが重要だったと考えられる。「せめて敏子だけは、変な型の女になる迄、持越させたくないものだ」という思いから、京子は敏子の思慕を知りつつ、秦との縁談をととのえるべく尽力する。世間的な価値観に沿った人生を歩ませたいという点には、敏子の幸せを願う、京子の姉妹愛が窺える。しかし、型通り結婚することが本当に幸せなのかどうか。作品における不安要素としては、京子が敏子の自分への思慕を知りつつ秦と結婚させたこと、また、秦が結婚に際して日本鬻を求めてきたこと⁽⁴⁾（これは、秦が旧弊な点を持つことを示している）が挙げられる。また、同時代の同性愛をめぐる言説では、結婚した女性が同性愛の相手への思慕を断ち切れないという展開がよく見られる。敏子の妊娠が知れるところで作品は途切

れているが、それは、ハッピーエンドとは限らない。敏子の今後次第では、女性にとって結婚とは何かという問題が掘り下げられた可能性があるのではないか。

本作では、女に付きまとう厄介さの数々が、京子、安子、敏子を通して描かれている。女たちは、まさに、京子が見つめる朝顔である。それぞれがその身にまつわる問題を背負いつつ懸命に花を開く。そして、その花は決して強くはない。教師を辞めた小菊は、どう生きるかを模索せねばならなかった。三人の女性を通して女性の問題を描き、それを見つめることは、教員ではない一人の女として生きていく覚悟を固めるために小菊にとって必要なことであったと思われる。

注

- (1) 『中野光 教育研究著作選集 第一巻「教育空間としての学校」』にも触れられているが、木下の「合科学習」が、演繹的に「目的にむかって論理構成的に進んだ」ことに原因があったようである（同書一四二頁）。小菊は生徒との親しい接触の中で、帰納的な関係を重視しており、昭和四年六月刊行の『父母としての教室生活』六三頁に「私の木下氏に対する不満は、それ程の氏の仕事、何故あ、雑薄なものになつて終つたのか。彼の仕事からどうして底光りする生命が生れて来なかつたのかと言ふことである。」

と、相当批判的に述べている。

- (2) 「りずむ」創刊号の四十四頁以下に全文引用している。それを参照して頂けたら幸甚である。

- (3) 「大矢透博士年譜」（『国語と国文学』五巻七号 昭和三年七月）によると、なつ子は明治二十一年生まれ、明治四十三年に「浅田重教氏に嫁す」とある。『国語と国文学』同号には「女婿 浅田重教」の署名で「岳父大矢透の片影」の一文がある。

- (4) 宇枝その子「女性生活の未来」（『女学世界』大正九年九月号）は、「日本髪は人の結つてるのを見るのはお菓子のやうで綺麗だけれど、自分で結はうとは決して思はない、首を碌に廻す事も出来ないである人達を見ると悲しくなる」という友人の言葉を紹介し、「非活動的で不経済な髪は、自然にすたれるでせう」と述べている。『女学世界』には大正九年十一月に小菊の「師範の或る乙女へ」を讀みて」という文章が載っており、それは、九月号の齋藤桃代「師範の或乙女へ」に対する意見を述べたものだった。したがって、九月号掲載の宇枝の文章も小菊が読んでいた可能性が高い。